

Title	アメリカ民主主義のゆくえ
Author(s)	有賀, 貞
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume25 : 7-33
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2832
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

アメリカ民主主義のゆくえ

有賀 貞

一 二〇〇八年大統領選挙の重要性

「アメリカ民主主義のゆくえ」という題でお話することをお引き受けしたときには、私はまだアメリカの金融システムの抱える問題が急激に悪くなつて、世界の他の国々をも巻き込む深刻な危機状態に陥るとは思つていませんでした。経済危機がどうなつていくのか予断を許しません、アメリカの民主主義はどこに行くのか、どの方向に進むのかという問いに答えることは、むしろ前よりも、語りやすくなつていともいえます。アメリカはテロリストや危険な独裁国家に対して世界秩序を守る唯一の超大国、自由主義市場経済に基づいて世界を先導する世界経済の中心国であるということが、現在のアメリカ大統領ジョージ・W・ブッシュの考えでありました。しかし、アメリカは今や世界秩序を維持する国ではなく、むしろそれを攪乱する国となつていきます。世論調査では、アメリカ人の大多数がブッシュ大統領を支持しないと云つていますし、アメリカが進んできた方向は間違つていないと思つていません。アメリカ人が政府の政策に変化を求めていることはたしかですが、来週のアメリカの大統領選挙は、アメリ

力の有権者が大きな変化を望んでいるか、あるいは、あまり変わらぬのも困ると思つてゐるか、そのどちらであるかの意思表示となるでありましょう。その変化とはたんに経済政策や対外政策に関する変化だけではありません。今度の選挙にはそれ以上に特別の意味があります。

今回の選挙が特別の意味をもつのは、皆さんもご存知のように、民主党大統領候補がバラク・オバマという若いアフリカ系アメリカ人の政治家であるからです。彼が大統領候補として登場したことは画期的なことであり、アメリカに新しい方向が求められているときに、アメリカ人はアメリカの変革を提唱するオバマを選ぶでしょうか、それともあまり変わらぬのもよくないと考へてブッシュと同じ政党の大統領候補ジョン・マケインを選ぶでしょうか。白人市民が多数を占めているアメリカの有権者がオバマを選ぶとすれば、それは画期的なことであり、アメリカの歴史の新しい頁を開くことになります。

二 古いアメリカの回顧

共和党のマケイン候補は一九三六年生まれ、七二歳ですからこれから初めて大統領になろうという政治家としては史上最年長ですが、オバマ候補は一九六一年生まれ、まだ四七歳です。私が最初にアメリカに行ったのは、オバマが生まれる六年前の一九五六年でした。当時のアメリカは今から見ますと、ずいぶん古いアメリカでありまして、アフリカ系アメリカ人の大統領が誕生することなど、まったく考へられない時代でした。私が初めて見たときのアメリカ、古いアメリカのことから話を始めましょう。

当時のアメリカはそのころの日本とは比較にならない豊かな国でありました。アメリカの通貨ドルだけが金との

直接の結びつきをもつ世界の基軸通貨で、他の国々の通貨とドルとの間には一定の為替レートの設定されています。日本の円は三六〇円で一ドル、日本は当時まだ経済力が弱かったので、日本政府が一ドル三六〇円という為替レートを守るために、為替を管理することが認められていました。アメリカは卓越した経済力によって、西ヨーロッパ諸国や日本の経済復興を助け、そして強力な軍事力によって、ソヴィエト社会主義共和国連邦（ソ連）を指導国とする共産主義国の勢力拡張を抑えることで、世界の秩序を維持していました。

当時のアメリカは幅広い中流階級が豊かな消費生活を送る国でしたが、しかし、そのアメリカでは、ヨーロッパ系のアメリカ人、つまり白人が重要な地位を独占しており、その他の人々は目立たない日陰の存在でありました。その意味でアメリカはまさに白人の国だったのです。

その頃のアメリカ人は敗戦国日本から来た留学生には寛大で親切であり、私はその親切さに驚いたのであります。が、カリフォルニアで出会った日系二世の学生は、第二次世界大戦前に差別され、戦争中強制収容された記憶が鮮明でありました。アフリカ系アメリカ人、当時はまだそういう言葉はなく、彼らは「ニグロ」あるいは「カラード・ピープル」と呼ばれて、黒人のほとんどは、差別された世界に住んでいました。メイジャー・リーグなどプロスポーツの世界は黒人にも門戸を開くようになっていましたが、そのほかのところでは、まだ日のあたる場所にほとんど姿を見せない存在でした。私が勉強したり訪れたりした大学にいた少数の黒人学生は、ほとんどアフリカからの留学生でした。教授には黒人は一人もいませんでした。とくにアメリカ南部の州では、厳しい人種差別が制度として残っていました。一九五六年夏、南部の州を鉄道やバスで旅行しますと、鉄道の駅の待合室は白人用と黒人用とに別れていました。市内のバスには、市の条例により、白人は前の席から座り、黒人は後ろの席から座れと書いてありました。そして空席がなくなれば、黒人は白人に席を譲ることが慣習だったのです。マーティン・ルー

サー・キング牧師の指導する公民権運動はまだ始まったばかりでした。バス乗車における人種差別は憲法違反であるという判決が出たのはその年の秋のことです。

一九五〇年代後半には、女性の大学教授は、女子大学以外の大学では数少ない存在でした。共学の大学で学ぶ女子学生の数は増えていましたが、生涯職業をもって働く道を選んだ女性はまだ少数でした。男性は外で働き、女性は家庭を守るという性的分業の伝統的観念がまだ広く残っていました。

三 古いアメリカの終り——多様性の国へ

このような一九五〇年代までのアメリカは一九六〇年代、七〇年代に崩れ始めました。六〇年代には、アフリカ系アメリカ人の公民権運動、都市黒人居住区での人種暴動、手段として暴力も否定しない戦闘的な黒人の闘争、性的平等を求める女性の運動、メキシコ系アメリカ人の運動、先住民の権利を主張する運動、そしてベトナム戦争の拡大と徴兵の増加に触発された若者の反戦運動、彼らの古い権威や道徳観念に反逆する行動などが盛んに展開されました（当時の黒人指導者は自分たちを「ブラック・アメリカン」と呼びました。「アフリカ系アメリカ人」(African Americans)という名称が一般化するのには、有力な黒人指導者ジェシー・ジャクソンが一九八八年にこの名称を使うことを提唱してからです）。

こうしたさまざまな運動の爆発に直面して、アメリカの白人指導者たちは、アフリカ系をはじめとする非白人および女性に対して、法律上の平等だけでなく、平等という原則を実生活においてより意味のあるものにしようとするようになりました。選挙年齢が二一歳から一八歳に引き下げられたのも一九七一年です。七〇年代には連邦政府

は、それまで差別されていた非白人や女性に積極的に入学や採用や昇進の機会を与える差別是正措置を奨励しました。その結果、白人男性がほとんど独占していた、良い収入と社会的地位とを得られる職業に、白人以外の人々、そして女性が進出するようになりました。移民の受け入れについても、人種・民族・宗教・出生地などによる差別がなくなり、ラテンアメリカおよびアジアからの移民が大勢アメリカに入国するようになりました。このようにして白人中心のアメリカ、男性中心のアメリカは変わり始めました。

やがて、多文化主義、英語でマルチカルチュラリズム (multiculturalism) ということばが使われるようになりました。このことばの通常の意味は、次のように定義できるでしょう。それは「アメリカはさまざまな文化をもつた人々が集まってできてきた国であり、それぞれがアメリカ文化の形成に貢献してきた。多様な人々が互いに影響を及ぼしつつ、自らの能力を生かしてアメリカの発展に貢献することがアメリカの強みである。それゆえどのような民族人種、宗教的背景をもっている人も、そして性別がどちらであっても、差別されてはならず、公平な機会を与えられるべきである」という考え方であります。このような考え方はアメリカで一般的に原則として受け入れられています。マルチカルチュラリズムという言葉は、アメリカ人に共通するアメリカ文化というものはないという主張としても使われましたので、ダイヴァーシティ (diversity) すなわち多様性ということばでアメリカの特徴を語る方がより普通であります。

アメリカの政治の歴史では、一九三三年から六〇年代末までは、民主党の時代でありました。民主党は政府による雇用の創出、福祉の充実に積極的だという意味で進歩的な党であり、共和党はそのような政策には消極的だという意味で保守的な党でありました。一九六〇年代に、進歩的な政策をさらに進めようとして、「貧困に対する戦争」を提唱したのは民主党のリンドン・ジョンソン大統領です。しかしジョンソンはベトナム戦争に深入りして、

民主党の支持層を分裂させました。ジョンソン大統領は、公民権法の制定や黒人投票権の保護など、人種差別撤廃の推進にも実績を上げましたので、人種関係についてももつとも保守的だった南部の白人民主党員が民主党から離れていきました。彼が引退した一九六九年に民主党の時代は終わったといえます。

四 共和党優位の時代——保守主義の台頭

アメリカの産業はベトナム戦争中の物価上昇のために国際競争力を弱め、さらに一九七〇年代には原油価格の高騰の打撃を受けて経済成長が落ち込みました。アメリカは、かつては世界第一の石油生産国でしたが、このときまでは、消費する石油の大部分を中東など海外の資源に頼るようになっていました。七〇年代初めにはアメリカはアメリカ経済が卓越した力をもっていた時期に設立した国際通貨体制を維持できなくなり、主要な通貨の間の為替相場は毎日の需要に応じて変動する仕組みに変わりました。

アメリカの政治では、それまで繁栄と福祉をもたらす政党として支持されてきた民主党に代わって共和党が優勢になりました。一九六九年からは共和党の時代と言つてよいと思いますが、とくに保守主義の党として共和党に勢いをつけたのは、一九八〇年の選挙で大統領に当選したロナルド・レーガンです。彼はベトナム戦争の失敗、経済の低迷、非白人たちの台頭などのために、民主党の進歩主義に不満を抱いて保守化した白人有権者たちに対して、保守主義による変革という方向感覚を与えようとしてきました。レーガン大統領はただアメリカを昔に戻そうとしていたわけではありません。彼は保守主義ということばに明るい前向きの意味を込めていました。

レーガンはグローバリゼーション時代の中で、アメリカの繁栄と発展を目指す経済戦略を考えていました。グ

ローバリーゼーションとは「大勢の人・大量のもの・かね・情報などが早いスピードで、国境を越えて世界を移動することに、世界のいろいろな地域の異なった文化をもった人々の経済活動や生活様式が国を越えて関連つけられ、影響を及ぼし合うようになること」と定義できると思います。

レーガンは、アメリカは衰退する国ではない、これから朝を迎える国なのだと言つて、国民を元気づけました。一九八〇年代には、アメリカ国内でもアメリカ衰退論を唱える人々が出ていたからです。レーガンの政策の根本理念は「小さい政府」がアメリカ経済を活性化するというものでした。彼は政府が大きくなりすぎて国民の負担になつていと言ひ、政府の仕事を減らし、役人を減らし、税金を減らし、民間にお金を残して、規制なしに自由な事業を行えるようにすれば、アメリカ経済は停滞から立ち直ると主張しました。彼は減税、とくに企業や高額所得者に対する減税を重視し、その減税分が投資に回れば、新産業新技術の開発も進むと考えました。他方で彼は福祉政策を切り詰める政策をとりました。行過ぎた福祉政策は貧しい人々から自立の精神を奪つてしまうので貧しい人々のためにもならないと彼は主張しました。

レーガンは、連邦政府による企業規制によつて公共の利益を保護するとか、高額所得者の所得税率を高くするとか、福祉の充実した福祉国家を創るというような、一九三〇年代から民主主義で進められてきた連邦政府の政策の方向を逆転させようとした。彼や彼の助言者たちは、こうした政策がグローバリーゼーションの時代に適った政策であり、そして世界に対して開放的なアメリカ経済を維持しながら、他の国々にも開放的な経済政策をとらせることで、アメリカ経済の活力を保てると思つたのです。

社会生活上のことがらでは、レーガンは家庭の重視、伝統的な道徳の維持、とくに自主自立の精神の回復、宗教心の復興などを主張しました。こうした主張は、それまで民主党を支持することが普通だった比較的低所得の白人

市民たちを彼の支持者にすることができました。そのような人々は、一九六〇年代以降のアメリカの変化を快く思わず、生活スタイルは保守的で伝統的な道徳と信仰をもっていましたので、家族の価値を大切にしよう、道徳の基礎である信仰を大切にしようというレーガンの呼びかけに共鳴しました。彼らがレーガンと共和党を支持した動機の一つは、それまで差別されてきた人種集団や女性に積極的に機会を与えようとする差別是正措置に対する不満であります。当時はその差別是正措置のために白人男性が逆に差別されているという反発が強くなっていました。

レーガンは政府の出費を削減すると言いましたが、軍事力増強については経費を惜しまず、ソ連をしのぐ強力な軍事力の構築に努めました。彼はベトナム戦争後アメリカが軍事力強化に手を抜いている間に、軍事力を強化したソ連が勢力を広げてきたから、ソ連を押しさえ込める強力な軍事力を再建することが必要だと主張して、ソ連の勢力を押し戻そうとする政策をとりました。しかしソ連がアメリカおよび西側諸国との対決政策を捨てて、関係改善外交に転じますと、レーガンはそれを歓迎し、彼の後継者ジョージ・ブッシュ大統領、今の大統領の父親のほうのブッシュ元大統領ですが、父ブッシュのときに、冷戦すなわち米ソ対決の時代に終止符が打たれました。

アメリカはレーガン構想を継承することで、アメリカ経済活動の中心を、従来の産業から国際金融や先端技術産業へと移し、アメリカ経済の活性化に成功しました。一九八三年頃からアメリカ経済は上向きになり、それ以来最近まで、短い不景気の時期を除いて、経済成長を持続してきました。冷戦が終わって一〇年近く経ちますと、アメリカは軍事的に世界の唯一の超大国であるだけでなく、一時揺らいだように見えた世界経済を先導する経済大国という地位を再び確立したように見えました。父ブッシュのあと大統領になったのは、民主党のウィリアム・J・クリントンですが、議会では共和党が優勢だったこともあり、クリントン大統領の経済政策や福祉政策はレーガンの保守主義が設定した路線を多くの点で受け継ぐものでありました。

五 共和党時代の終り

現在の大統領、ブッシュ元大統領の息子のジョージ・W・ブッシュ大統領の政府はレーガンの保守主義の構想を、新たな状況の中でさらに徹底的に推進しようとして失敗したといえます。彼の政権への支持がすっかり下がってしまつた理由は、次の四つにまとめられます。第一に、彼はレーガン大統領が新たな戦略防衛システムの開発によりソ連から攻撃されることのない安全な状態を作ろうとしたように、九・一一テロ事件を受けて、テロリストを武力によつて叩き、さらに反米的な独裁政権も叩くことによつて、アメリカが再びテロ攻撃を受けることのない安全な状態を作ろうとしました、そのためテロリストをかくまう勢力が支配するアフガニスタンを攻撃したばかりでなく、イラクの独裁者フセインの政府まで、テロとの戦争に強引に結び付けて攻撃しました。レーガンの場合、当時のソ連からのミサイル攻撃に対する防衛方法の開発に力を入れたのですが、ブッシュは軍事力で外に打つて出る策をとつたのです。アメリカが武力によつてフセイン政権を倒すことは簡単でしたが、そのあとに秩序を作り、安定した政府を樹立することができませんでした。イラクの混乱が長引き、米軍兵士の犠牲者は増え続け、世界全体におけるアメリカの威信と影響力が低下しました。こうしてブッシュのイラク政策は世論の支持を失いました。

第二に、今の米軍は職業軍人と志願兵で構成され、それを補助する部隊として諸州の州兵（通常は市民生活を送りながら志願して毎年一定期間軍事訓練を受け、州内の非常事態の際に州知事により召集される非常勤の兵士ですが、大統領は必要に応じて州兵を自らの指揮下に入れることができます）がイラクに派遣されていますから、イラクで戦う兵士たちは、軍に志願して将来の教育資金を得ようと思つたり、州兵としての報酬を収入の足し前にしてい

たような、比較的所得の低い家庭の人々が多いのです。生活に余裕はないが真面目に働こうという市民の家族が戦争の重い負担を負わされています。他方でブッシュ大統領は富裕層の負担する税金をさらに減らし、貧富の格差をさらに大きくしました。ブッシュ大統領が自分たちの道徳理念を信奉し、それを法律化することを約束したことで、これまでブッシュを支持してきた宗教的保守派といわれる人々の中にも、今は社会的公正への配慮の必要を唱える人々が多くなっています。近年のアメリカは貧富の格差の増大を放任してきたために、デモクラシー社会の意味を空洞化させてしまいました。これが第三の理由です。

そして第四に、政府の規制が甘くなっていた証券会社が、いわゆる金融工学を用いて開発したいかがわしい金融商品の大量販売を行い、不動産価格の下落が始まると、不良金融商品を乱発したつけが回り始め、最近の金融システムの危機を招いたのであります。ブッシュ政権は市場経済の自律性を過信して対応が不十分だったため、事態を悪化させ深刻な経済危機を招きました。これでブッシュ政権の不人気は極点に達しました。

共和党の大統領が有権者の支持を失ったのですから、今度の選挙では、民主党の大統領候補が有利なはずで、合衆国議会の議員の選挙では民主党が多数を獲得することも、民主党から大統領が出るのも自然の成り行きといえます。このような情勢になれば、勝負はついてはいるはずなのです。それでもなお、大統領選挙の見通しについて？マークがつけられてきたのは、共和党候補がこれまで党の主流派とは一線を画してきた人物だということもありますが、主な理由はやはり民主党の大統領候補がアフリカ系アメリカ政治家であるためであります。民主党のオバマ候補が敗れ、共和党のマケイン候補が勝つとすれば、多くの白人アメリカ人は新たな政策への願望よりも、アフリカ系アメリカ人を自分たちの大統領にはしたくないという心持ちが強かったということになります。他方、オバマ候補を当選させるとすれば、アメリカ人は、白人市民を含めて、新しい政策への期待を込めて、初めてアフリカ

系アメリカ人の大統領を選んだということになります。今の状況はアメリカ人が新しい政策を求めなければならぬという意味で、そして新しい政策への期待をもたせるカリスマをもつオバマという政治家が登場したという意味で、白人系アメリカ人に、人種意識、人種感情を乗り越えるためのよい機会を与えているといえます。

六 グローバルで多文化的なアメリカの息子

バラク・オバマという政治家の登場の意味について考えるためには、この人がどのような生い立ちの人であるのか、そしてどのようにして政治家への道を志し、今年の選挙で大統領を目指すことにしたのかについて、お話ししなければなりません。

オバマの父親、バラク・フセイン・オバマはアフリカのケニアからホノルルにあるハワイ大学に留学してきた学生です。オバマの母親アン・ダンハムは白人のアメリカ人で、カンザス出身の両親とともにハワイに住んでいました。彼女まだティーンエイジャーでしたが、ケニアからの留学生と結婚し、一九六一年にバラクを生みました。当時、ハワイにはアフリカ系アメリカ人もアフリカ人留学生もあまりいませんでしたから、彼女は珍しい冒険をした少女でした。この人はなかなかユニークな女性だと思います。オバマの父はハーヴァード大学進学が念願だったので、妻子をハワイに残して、ハーヴァード大学の大学院に進学し、やがてオバマの両親は離婚します。オバマの父はハーヴァード大学で博士号を得た後ケニアに帰りますが、一九八二年に交通事故で死にました。母親はオバマ氏と離婚してから、インドネシアから来た学生と一九六七年に結婚し、一時はインドネシアで暮らしていました。バラクもインドネシア人の学校に通いましたが、母は彼にアメリカの教育を受けさせるために、ハワイにいる自分の

両親に彼の世話を託します。彼の母は異文化の男性と二度結婚し、二度離婚し、それぞれの結婚で一人ずつ二人の子供を生み、それから文化人類学を勉強して、インドネシアやポリネシアの文化に詳しい学者として認められますが、一九九五年に亡くなりました。バラク・オバマが少年期を過ごしたのはハワイです。ハワイは、一八九八年にアメリカの領土になりますが、州になったのは一九五九年で、アメリカ五〇州の五〇番目の州です。日系アメリカ人が多く住んでいるところであり、太平洋圏のさまざまな文化が混在・融合しているところでもあります。

バラク・オバマは父親がケニア人、母親が白人、そして母方の祖父父母のもとでハワイの多文化混合の環境の中で育ち、父を異にするインドネシア系の妹がおり、またケニアにはケニア人の祖母や異母兄弟がいるという、グローバルで多文化的な親族関係をもっている人であります。オバマは白人の祖父父母とハワイで暮らし、学校では、白人、黒人、アジア系の生徒とつきあい、白人の心持ちも、黒人の心持ちも、アジア系の心持ちもわかるようになります。その中に入っていけるようになります。しかしこのような生い立ちの自分を何者と考えて生活すればよいかは悩ましいことでした。オバマ少年はロサンゼルス郊外の大学で二年勉強してから、ニューヨークの名門校コロンビア大学に転入学して、政治学を専攻して卒業しました。大学での生活では、彼はアフリカ系アメリカ人の学生の中で社交生活を送りますが、そのなかで、自分がカンザス生まれの白人の母の子であり、彼女からいろいろ教えられ、祖父母に愛され育てられたことも、彼がケニア人の父の子であるという事実とともに否定できないことであり、彼の個性を形成していることをあらためて自覚するようになります。

そのようなオバマの生い立ちと、自分は何であり、自分の居場所はどこかを考えて苦悩した若い日々のことは、彼自身の最初の著作に、率直に書かれています。その本は一九九五年の初版ですが、彼が有名になった二〇〇四年に新版が出てから、広く読まれました。*Dreams from My Father: A Story of Race and Inheritance* という題の本です

『父からの夢』という題ですが、日本語版は『マイ・ドリーム——バラク・オバマ自伝』という題になっています(ダイヤモンド社、二〇〇七)。オバマはもう一冊 *The Audacity of Hope* (大胆不敵な希望という意味の題) という二〇〇六年の著書がありますが、これは自分の政治家としての経験を語りながら、アメリカの政治を論じたアメリカ政治論というべき著作です(『合衆国再生——大いなる希望を抱いて』という題で訳書が出ています(楓書店、ダイヤモンド社(発売)、二〇〇七))。

バラク・オバマはグローバリゼーションのなかのアメリカ、ディヴァーシティ(多様性)が目立ってきたアメリカに生まれ、そのようなアメリカで育った人、アメリカの多様性を内在化した人なのだということができます。そして彼がアメリカで大きな活動の場を見出すことができたのは、近年のアメリカが多様性という性格をいつそう強めてきたからなのであります。

バラクは大学を卒業してから、しばらくニューヨークの企業で働きますが、人の役に立つことをしたいという志をもって、シカゴでアフリカ系の低所得の市民が住む地域で地域活動に従事します。シカゴに行くことになったのは、彼のコミュニティ活動をしたという就職希望に対して、よい返事をくれたのが、シカゴだけだったからなのです。その活動の経験から、社会を変えるために大きな仕事ができるのは法律家であり、また政治家であると考えて、一九八八年にハーヴァード大学のロー・スクール(法科大学院)に入学します。このロー・スクールで、オバマは彼の独特の才能を発揮するようになります。異なった立場の人々の間に立って、それぞれを説得し、合意をまとめていく才能です。当時ハーヴァードのロー・スクールは教授にも学生にも保守派と改革派との対立がありました。彼は双方の信頼を得て、ロー・スクールの機関誌の編集長に選ばれました。教授たちは彼が法律家として出世の道を歩むことを期待しますが、彼は貧しい人々のための法律事務所に入り、コミュニティ活動をしながら、や

がて政界に出ることを考えていました。彼が考えていたコミュニティ活動とは、貧しい人々が住む地域社会で、地域の環境改善のための住民の草の根的な組織を作り、アメリカをまずローカルな地域から変えていくことでした。彼はコミュニティから国全体を変えていくことを目指したといえましょう。

オバマは一九九一年ロー・スクールを卒業すると、すぐにシカゴに戻り市民権問題の弁護士として法律事務所に勤め、翌年そこで働いていた同僚弁護士ミッシェル・ロビンソンと結婚し、シカゴに落ち着きました。二人の女の子がいます。ミッシェル・ロビンソン・オバマはシカゴのアフリカ系市民の居住区サウスサイドに住む質素で堅実な両親に育てられ、公立高校からプリンストン大学に進学し、そしてハーヴァード大学ロー・スクールに学んだ女性です。彼女も非常に能力のある人で、社会的にも活動し、バラク・オバマのよきパートナーですが、彼女はアメリカ社会に根を下ろすところがなかったバラクに家庭を与え、彼にシカゴという定住の場を与えた人なのであります。オバマはシカゴで弁護士としてコミュニティ活動をしながら、シカゴ大学のロー・スクールでも教えていましたが、一九九七年に民主党員としてイリノイ州の州議会上院の議員となり、政治家への道を踏み出しました。

バラク・オバマが明確にキリスト教信仰をもつようになるのは、シカゴに来てからであり、サウスサイドのトリニティ合同キリスト教会のジェレマイア・ライト牧師に導かれてこの教会の会員になりました。彼はコミュニティ活動のためにこの教会の協力を求めようとして、この教会を訪れたのですが、日曜日の礼拝に参加して感動します。アフリカ系アメリカ人の教会の多くは独特の雰囲気をもっています。牧師の説教途中でも、会衆は同感するたびにアーメンと叫びますし、賛美歌を歌うときはみんな手をつなぎます。連帯感、一体感を高める礼拝の仕方です。オバマ青年は自分を温かく抱擁してくれるこの教会の雰囲気を感じたのです。ライト牧師の教会は「恥じることなく黒人であり、弁解することなくクリスチャンである」という標語を掲げていました。黒人であることに自尊心を

もって生きる、キリスト教は白人の宗教だなどという批判には耳を貸さず、堂々とキリスト教信仰を告白するといふ意味でありましょう。ライト牧師は、黒人が中流階級の暮らしができるようになって、大勢の貧しい人々のことを兄弟と思い、黒人全体の地位向上のために奉仕しなければいけない。アフリカにいる人々のことも忘れるなど、つねに説教してきました。

ライト牧師は教会での説教の中で、アメリカ批判、白人アメリカ批判を厳しく行ってきた人であります。「アメリカは欺瞞に満ちた国だ。人間は平等に創られたと宣言しながら、それをまったく無視してきた。黒人を奴隷にし、そして差別し抑圧してきた」と言い、九・一一テロ事件のあとも、「アメリカも、戦争で外国の一般人を大勢殺してきた」「だから同じことをされたのだ。アメリカにつねに正義があると考えるな」と説教で語ってきました。ライト牧師は有力な大統領候補オバマが所属する教会の牧師（引退後は名誉牧師）だということ注目されるようになり、今年三月には彼のこうした発言がメディアに流れて、これは非愛国的な反アメリカ的発言ではないか、オバマはこのような牧師の教会にいたのか、オバマはこのような発言を容認するのか、と反オバマ派が騒いだことがありません。こうした発言はライト牧師がアフリカ系アメリカ人の会衆のための説教で話したことです。その発言の一部を取り出して、アメリカ人全体のために語っているオバマの演説のことと比べれば、大きな隔たりがあります。ライト牧師はアメリカの約束を欺瞞的だと言い、白人社会を批判しましたが、政治家オバマはアメリカの約束の実現につねに前向きな希望を語ってきました。

このとき、オバマはあらためて自らの家族的背景とアメリカの人種問題についての考えを語る演説をしました。彼はアフリカからの留学生を父としカンザス州出身の白人を母として生まれた自分の生い立ちに触れ、たしかに自分は通常の大統領候補とは違う家族的背景の持ち主であるが、そのような自分が大統領候補になれるアメリカとい

う国を誇りに思うと述べ、「多くのものから一つのまとまり」を創ることがアメリカの建国の理念であるならば、むしろ私のような者こそ、この国のまとめ役に相応しいのではないかと語りました。それから彼は人種問題について話しました。私は白人の祖母と暮らして、彼女のような白人たちが黒人一般にどのような固定観念を抱いていたことも知っているし、またアフリカ系アメリカ人としてライト牧師がなぜこのような発言をしたのかもわかる。私にはその祖母もライト牧師も大切な人なのだ。アメリカの黒人には長年の差別の経験に対する強い怒りや不信があり、白人の中には白人だからといって社会で優遇されたとは思えない人々、むしろ差別は正措置により黒人が優遇されたという怒りをもつ人々がいる。しかしそのような怒りのためにアメリカ人がアメリカ人全体の利益のために結束して行動できないとすれば、それは悲劇ではないか。今こそ、そのような状況を打破すべきときではないかと問いかけました。彼は人種の違いを超えて、アメリカ人としてアメリカにとつて何が必要かを考え、協力して行動しようと呼びかけ、自分はアメリカ人が人種の違いを超えて「より完全なアメリカのまとまり」を実現するために働く」と訴えました。この三月十八日の演説は歴史に残る名演説で、選挙戦の動向にも大きな効果がありました。(その後ライト牧師は講演の中で、黒人は白人とは脳の働き方が違うという発言をしますので、これは人種主義ではないかと再び批判されます。それでオバマ夫妻は五月には彼の教会を離れることしました。)

七 民主党の「ライジング・スター」

バラクが政界入りしたのは、一九九七年ですから、政治家としてはまだ一〇年そこそこの経歴しかありません。まず州議会の上院議員に当選し、州上院で活躍します。彼はシカゴの黒人居住区を選挙区とする民主党の革新的な

議員でありましたが、保守的な白人を代表する共和党議員ともよく話し合つて、建設的な立法をまとめて議会を通すことに才能を発揮しました。ハーヴァードのロー・スクールで発揮したのと同様の、調整者、説得者という才能をここでも発揮したのであります。

彼は二〇〇〇年にワシントンの政界への進出を狙い、合衆国下院議員を目指しますが、そのときは失敗しました。しかし彼は二〇〇四年には、合衆国下院議員ではなく、上院議員を狙い、民主党から出馬して、圧倒的な多数、七〇%の得票を得て当選しました。上院議員は州の代表ですから、州を選挙区として選ばれます。ということは、アフリカ系有権者だけでなく、かなりの数の白人有権者の支持も取り付けなければならぬことを意味します。彼はそれができたのです。もつともこのときは共和党の対立候補もアフリカ系アメリカ人で極端な保守主義者でした。

オバマはその選挙までにはある程度全国的に注目されるようになっていました。イリノイ州の民主党上院議員候補に決まっていた新進政治家として、その年の夏の民主党全国大会では、彼は基調演説者の一人に選ばれ、その演説が全国放送されて評判になりました。それ以来、彼は民主党の「ライジング・スター」つまり「期待の星」といわれるようになったのであります。なぜアフリカ系の政治家であるオバマが期待の星といわれたのでしょうか。それはアフリカ系でありながら、白人を含めたアメリカの市民たちを惹きつける魅力をもっていると思われたからです。それまでのアフリカ系の政治家は、主として黒人市民を代表し、主として黒人市民のために活動する者と思われがちでしたが、オバマはアメリカの国民的代表となれる政治的逸材として期待されたのです。アフリカ系アメリカ人にとっては、初めて大統領が出ることは画期的なできごとですから、彼らは熱心にオバマを支持しています。ただしアフリカ系の有力者の中には、最初は、オバマの人気上昇について、白人によって彼ら好みのアフリカ系スターに仕立てられた人物ではないかと思ひ、冷ややかに見る人々がいたことも事実です。しかしオバマは彼の立場

について疑問を述べたアフリカ系指導者たちとの対話にも力を入れ、彼らを支持者に取り込んでいきました。

合衆国下院議員は小選挙区から選ばれますから、アフリカ系議員もアフリカ系市民が多い選挙区から四二人選ばれており、下院議員総数の約一〇%を占め、人口（二一・一%）に比例しています。しかし上院議員五〇州の代表一〇〇人のうち、アフリカ系議員はオバマ一人だけです。州全体が選挙区で、有権者の多数は白人市民ですから、アフリカ系の政治家は当選が難しいのです。州知事についても同じことがいえます。アフリカ系の州知事は現在二人います、マサチューセッツ州知事とニューヨーク州知事です。ニューヨーク州知事は前任者が醜聞で辞任したために副知事から昇格した人です。ちなみにアジア系（人口は三・六%）は上院議員二人、下院議員六人、ヒスパニック系（人口一二・五%）は上院議員三人、下院議員二六人です。アジア系の上院議員二人はともにハワイ州選出の日系アメリカ人です。ヒスパニック系アメリカ人の州知事はニューメキシコ州知事一人です（これらの人数は二〇〇八年一〇月当時の数を示し、人口比率は二〇〇〇年の人口調査に基づくもの）。これらの数字をあげたのは、アメリカの政界人の構成もアメリカ社会の多様化を反映していることをお話しするためであります。ブッシュ大統領の重要閣僚にもパウエル前国務長官やライス国務長官などアフリカ系の人々がいます。ブッシュ大統領は保守的な白人市民を支持層とする共和党の大統領ですが、アフリカ系、ヒスパニック系、アジア系、そして女性を閣僚に多く起用してきました。このような多様化状況があつて、初めてオバマ大統領の出現も考えられるわけですが、今あげた数字は、他方では、白人有権者が多数を占める州を一つの選挙区とする選挙では、アフリカ系アメリカ人政治家が候補者となり当選するのは難しいことを示しています。

ついでに申しますと、女性州知事は六人、女性上院議員は一三人いますので、アフリカ系政治家より白人女性政治家のほうが州知事にも上院議員にも当選しやすいということが出来ます。したがって、白人が有権者の多数を占

める多くの州で勝たなければならぬ大統領についても、一般的に言えば、アフリカ系政治家よりは白人女性政治家のほうが当選しやすいということになります。

そのようなわけで、アフリカ系政治家が大統領になるのはまだ難しいだろうと思われました。大統領はアメリカの内政外交を行う最高の為政者であるだけでなく、いわばアメリカの顔であります。アメリカの有権者の多数を占める白人市民が、顔つきが違うアフリカ系の政治家をわれわれの大統領、自分たちの大統領として支持するでしょうか。バラク・オバマという名前もアメリカ人らしくないと思われるでしょう。大統領を目指すにはまだ経験が浅すぎるかもしれない、アフリカ系政治家として大統領を狙うのはまだ早いかもしれない、外国風の名前では不利かもしれない。しかしそれでもオバマは二〇〇八年の大統領選挙を目指すことに決心します。それは、彼がすばらしい演説ができ、立派な文章も書ける政治家、背が高くスタイルもよい、クールなカリスマ性をもつ政界のライジン・グ・スターとして、二〇〇四年以来注目されるようになっていたからです。二〇〇六年の議会選挙では、民主党が下院議員選挙で圧勝し、上院でも僅差で多数党となりました。有権者がブッシュ政権の政策、とくにイラク政策に嫌気を指した結果であります。

民主党で大統領選挙に出ると予想され、最有力候補と思われていたのは、ウィリアム・J・クリントン前大統領の夫人であり、二〇〇一年からはニューヨーク州選出の上院議員として知名度が高いヒラリー・クリントンです。民主党の大統領候補になるには、各州で行われる予備選挙あるいは党員会議に勝って、党の全国大会に出る代議員の過半数を獲得しなければなりません。民主党にはほかに候補者は数人いましたが、民主党有権者の選択肢は、初めて女性政治家を大統領候補に指名するか、それとも初めてアフリカ系政治家を大統領候補に指名するか、どちらかに絞られていきました。ヒラリーは民主党大統領候補に指名されるのは自分だと思っていました。彼女には夫

が大統領だったときからの人脈や金脈がある、そして女性初めての有力な大統領候補として女性有権者の支持を得られるという自信がありました。しかし彼女には新鮮さが欠けていました。彼女の第一のアドヴァイザーが彼女の夫であるクリントン前大統領でしたから、女性大統領の新時代を作りましょうというには、クリントン時代の再来を思わせるという点で、新しさが乏しかったのです。

オバマの選挙運動の特色は、次の三つです。第一に、人種的背景を問わず、若い人々を惹きつけたことです。オバマは若々しく、そして今申し上げたようなスター性、カリスマ性があり、そして何よりも心に訴える演説によって若い人々の共感を得ました。第二に、それまで選挙に参加しなかった人たちに政治への関心をもたせ、彼らを政治に引き入れたことです。それまでの選挙では、若い人の投票率は年長者に比べてかなり低いことが普通でしたが、彼がいなければ政治に関心をもたなかった年齢層の人々を、彼は積極的な支持者、活動家にすることができました。アフリカ系市民も、政治への諦めや無関心から、通常投票しない人々が多かったのですが、オバマの運動は彼らの選挙への参加を促しました。このような人々の参加が彼の運動の強みとなりました。第三に、オバマの選挙運動はインターネットの最新技術を駆使して支持者から小額の献金をたくさん集めて巨額の選挙資金を得たことです。このお金集めの方法の成功が、オバマの選挙運動の成功の鍵となりました。

アメリカの大統領選挙には、予備選挙にも、本選挙にも、連邦政府の公費を支出する制度がありますが、それを受け取れば、いろいろ制約がありますので、資金調達に自信があれば、予備選挙費用への補助金を受けないのが最近は普通です。予備選挙に備えてクリントンは二億ドル近く、オバマは約二億七〇〇万ドルを集めました。クリントン陣営は予備選挙での予想外の苦戦のため、一時運動資金が足りなくなったことがありましたが、それに比べるとオバマ陣営には常時資金が流入する余裕がありました。オバマ候補は自らの集金力に自信をもちましたので、

本選挙のための公費も辞退して、運動を続けてきました（オバマ候補は九月だけで一億五〇〇万ドルを集めたといわれています。他方、共和党のマケイン候補は連邦の公費を受け取って選挙を戦いました。テレビを使った選挙運動にオバマ陣営はマケイン陣営より約三倍の資金をつぎ込むことができています。）

各政党の大統領候補者を決めるプロセスはそれぞれの州での予備選挙などによる党大会への代議員選びを経て、決まる前年十二月から六月までかかる長い道のりですが、通常は二月・三月に行われる多くの州の予備選挙で有力候補が一人に絞られることが多いのです。今年の民主党の場合は結果が出たのは六月になってからです。クリントンは最初、自分のほうが大統領に相応しい政治経験があると主張して民主党員の支持を得ようとしていますが、オバマが若い人たちの政治参加を呼び起こして優勢になりますと、民主党支持の白人の男性労働者を味方にする作戦に出ました。民主党支持の白人男性にもアフリカ系の大統領候補よりは白人女性の大統領候補のほうがよいという人たちは多くいます。そのような作戦の結果、彼女は三月の幾つかの大きな州の予備選挙でオバマより多くの票を得て追い上げましたが、オバマの優勢を覆すことはできませんでした。クリントンが支持してくれると期待をかけていたスーバー代議員（各州で選ばれる代議員とは別に、政治的要職にある者の特権として全国党大会に出席し投票できる代議員）つまり党の有力政治家たちも、オバマ支持を表明しましたので、クリントンも敗北宣言を出して、オバマを支持して民主党の勝利を目指すことになりました。

八 オバマのメッセージ

民主党の大統領候補の地位を確実にしたバラク・オバマはどのような演説をして人気を獲得したのでしょうか。

彼の演説が、人種を超えて多く聴衆、とくに若い人々を魅了したのはなぜでしょうか。彼の好んで用いる言葉は次の四つであります。キーワードとして、「変化」(Change)、「希望」(Hope)、「約束」(Promise)、「夢」(Dream)の四つをあげることができましょう。これらはみな、アメリカの伝統ともいうべき樂觀主義のことばです。未来志向、つねに前向きに前進しようとする樂觀主義のことばです。変化はつねによりよいものをもたらす、それぞれが未来に希望をもつて生活し、夢をかなえよう、それがこのアメリカという国の約束なのだ。そのようなアメリカの伝統であった樂觀主義が失われてしまったが、それを取り戻そうというメッセージです。

彼の演説で使われ、選挙運動で用いられた名文句としては、希望を現実に変えることを信じる前向きな精神そのものを表現する標語というべき「イエス・ウィ・キャン」が一番よく知られています。私たちがこぞ、私たちが自身が待ち望んでいた人々なのだ」あるいは「私たちがこぞ、私たちが求めている変化なのだ」とか、「私たちがその変化を信じられるのです」というようなことばも彼の演説の効果を盛り上げた印象的な名文句でした。

彼の人氣が上昇した頃、彼の演説には人を動かす力がある、宗教的集会の雰囲気があると評した人々がいます。たしかに「待ち望む」とか「信じる」ということばには宗教的な要素があります。オバマは保守だとかリベラルだなどといった、アメリカの中に敵を作るのをやめよう、人種の違いなどにこだわることをやめよう、アメリカ人として皆協力し合おうと呼びかけてきました。そしてこうして集まった人々、つまり私たちがこぞ、私たちがこうして集まって運動していること自体が、私たちが待ち望んでいた変化そのものではありませんか、だから私たちができるのだ、アメリカを変えられることができるのだと、信じましょう。それがオバマのメッセージでした。オバマは多様なアメリカ人が、私たち「ウィ」として結集することによって、生まれ変わり、アメリカを再生させようではないかと呼びかけているのです。

オバマという人の特色は、アフリカ系アメリカ人の政治家でありながら、すべてのアメリカ人を代表しようとする政治家として登場し、アメリカ人を再結束させることを目指す大統領候補になりえたということです。オバマは自分がアメリカの再結束を象徴する指導者であることを国民に訴えようとはしましたが、政策の面ではどのような政策によってアメリカの再結束を図ろうとしたのでしょうか。彼は民主党の大統領候補として共和党のマケイン候補と闘うことを意識して、次第に政策論議を具体化するようになりました。

彼はテロに対抗する軍事行動の必要を否定しませんでした。選挙戦開始のときからイラク戦争は間違った戦争だったと主張し「彼は二〇〇二年にはまだ州議会議員でしたが、イラク攻撃に反対し、この戦争の失敗を予見する演説をした数少ない政治家です」、イラクでの軍事行動をやめること（具体的には一六カ月以内に戦闘部隊の全面撤退）を提唱しました。内政面で彼が重視したのは、より多くのよい仕事の創出、医療保険制度の改革、教育の機会の均等化による公正で活力ある社会を実現することとであり、もう一つ重視したのは温暖化の防止、クリーン・エネルギー開発などの積極的長期的政策の推進です。

九 本選挙におけるオバマ候補の優勢

共和党の大統領候補になったのはジョン・マケイン上院議員です。彼は共和党の中では変り種とみなされてきた政治家で、保守的な共和党員とは一線を画し、一匹狼的な行動をとってききましたので、大統領候補に指名されたことがありませんでした。その彼が今年には予備選挙の初期に一人勝ちの状態になったのは、保守派の支持を受ける有力な政治家がいなかったためであります。

マケインは代々海軍軍人の家系の人であり、彼自身も軍人としてベトナム戦争に従軍し、後に政治家に転進した人物です。彼の飛行機が撃墜されて北ベトナムの捕虜になっても、アメリカを批判することも拒否して、長く苦しい収容所生活を耐え抜いた筋金入りの愛国者であること、そして安全保障問題に詳しい政治家であることをセールス・ポイントにして、自分こそ大統領に相応しい人物であると有権者に訴えようとはしました。彼は二〇〇六年までのイラク戦争のやり方は失敗だったが、ブッシュ政権がマケインの望む方向に政策を変え兵力増強に踏み切つてからは軍事行動の成果を上げている、だからさらなる成果が上がるまで兵力削減や撤退をすべきではないと主張して、オバマに対抗しようとはしました。彼は本選挙では共和党保守派の積極的支持を得るために、そしてまた女性票を狙つて、副大統領候補にアラスカ州の保守的な福音派プロテスタントである若い女性知事サラ・ペイリンを指名しました。

九月に本選挙が始まつた当初、世論調査機関の支持率調査ではマケインはオバマと競り合い、勢力伯仲と見られたときもありました。共和党の政権が非常に不人気であるのに共和党の大統領候補者がオバマと支持率で競り合えた主原因は、オバマが白人ではないということだったと思えます。ある研究機関の調査によれば、民主党の大統領候補者がアフリカ系である場合には、白人である場合に比べて、有権者の支持が5%減るといふ結果が出ていました。オバマについて、アフリカ系だから相応しくないと感じる人とともに、オバマはアメリカに十分根を下ろした人間とはいえないからアメリカの顔、アメリカの最高指導者には相応しくないと考えて、彼への投票をためらう人たちもいるでしょう。彼の名前のミドルネーム「フセイン」を意味あげに強調したり、彼は隠れイスラム教徒だなどと言いついている人たちが実際にいます。

支持率調査でオバマ候補がはつきり優勢になつたのは、九月半ばに深刻な金融危機が発生し急激なアメリカ経済

の悪化が始まってからであります。市場原理至上主義といった感じがあつたブッシュ大統領の政府も、金融システムの崩壊を防ぐためには大手の証券会社や大銀行に公金を注入する介入政策に踏み切らなければならなくなりました。マケインは軍事問題には詳しい人ですが、経済問題には強くない政治家でしたし、少し前アメリカ経済は根本的には健全だと言つたばかりでした。選挙民の関心は大きく変わりました。自分が仕事をもち、住居をもっているとしても、明日それらを失うとも限らないという経済的な危機に直面して、有権者の期待は何か大胆な経済再建政策をとつてくれそうな民主党のオバマ候補に向けられることになりました。多くの白人有権者にとって人種的な要素よりも自分たちの生活のために何をやってくれるかが関心事になりました。

一〇 オバマの運動とアメリカの民主主義

そうなることはまず確実であると思いますが、オバマが来週の大統領選挙に勝つとしますと、それはアメリカ民主主義にとつてどのような意味があるでしょうか。

これでアメリカ社会にある人種の偏見がなくなつたというわけではありません。しかし経済的危機の発生という事態にも促されて、アメリカ人は大きな壁を一つ乗り越えることができたといえます。アメリカの顔でありアメリカの代表であるアメリカの大統領、ホワイトハウスの主人公に初めてアフリカ系アメリカ人を選んだのです。黒人奴隷制度の歴史、人種差別の歴史をもつアメリカ、アメリカは白人の国でありアメリカの民主主義とは白人の民主主義なのだという意識が長い間根付いていたアメリカで、多文化的背景をもつアフリカ系アメリカ人が大統領に選ばれることは、画期的なできごとであります。アメリカの民主主義はこれだけ変わらうのだということを実証す

ることになりますし、それによってアメリカ人は新しいアメリカ物語を創ることができるといえます。これが第一の意味です。

そしてオバマが当選するにせよ、またたとえ僅差で敗れるとしても、「ポスト・エスニック・アメリカンの世代」と言いますか、人種の違いをあまり意識しないで交流し社会生活を営むことができる新しい世代の大勢のアメリカ人がいることがはつきりしたことも、この選挙の重要な意義であります。その流れは一層進むでしょう。これが第二の意味です。

また、オバマの選挙運動によって、新たなネット・コミュニティの形成の可能性が示されたこと、地域的なコミュニティがインターネットで結び付き全国的な仮想コミュニティを形成することが可能であることが示されました。それも人種を超えた多様な人々のコミュニティなのです。アメリカの大統領選挙は規模壮大な選挙運動でありまして、それに動員される活動員の数もつき込まれる費用も膨大なものでありますが、市民の自発的行動によって選挙活動の輪が広がり、小額の個人献金の累積によって巨額の運動資金が調達されるところに、アメリカ民主主義の強みがあるといえます。その意味でオバマの運動はアメリカ民主主義を活性化させました。これが第三の意味であります。

さてアメリカの金融恐慌をきっかけにアメリカは厳しい経済不況に入ろうとしています。それは大勢の貧しい人たちだけでなく、広く中流の人々の生活にも大きな打撃を与えるでしょう。一九三〇年代の大不況と似ています。新しい大統領はアメリカ経済をどのように再建するのか、アメリカの活力をどのように再生させるのかという課題に就任当初から取り組まなければなりません。しかも国際社会にはイラク戦争をはじめとさまざまな難問が山積しています。今のアメリカは危機の時代にあるといえます。そのような時代に対処する指導者として、アメリカ

人はバラク・オバマを大統領に選ぶ可能性が高まっています。彼は国民の選択と世界の期待にこたえられる指導者になれるでしょうか。

オバマが大統領に選ばれるとすれば、彼はイリノイ州世界の政治家から大統領になる二人目の人物となります。一人目の大統領はリンカーンであります。リンカーンはご存知のとおり、合衆国の南北分裂の危機に際して大統領に就任し、内戦の勝利と奴隷制度の廃止への道筋をつけた大統領であります。オバマはリンカーンのようにアメリカ合衆国を危機から救い出す指導者となるでしょうか。私はその可能性は大いにあると思います。リンカーンとオバマとは政治家として似たところがあります。ともに理想主義的な未来展望をもちつつ、その方向に向かって、現実の政治の動きの中で、実現可能な政策を進める実際の精神の持ち主であります。ともに意見を異にするさまざまな人々を説得する能力があり、また聴衆と読者との心をとらえる演説家・文章家であります。私はオバマ氏が大統領に選ばれ、そしてアメリカの危機を救う指導者になることを期待しています。彼の当選の場合、私が切に祈ることは、再任後もなく凶弾に倒れたリンカーンの不幸が繰り返されないこと、彼が国民から委ねられた任期を全うできることであります。

(注記) これは二〇〇八年十月二十九日(水曜日)に行われた聖学院大学創立二〇周年記念特別講演の講演草稿を編集したものです。当日は時間の関係でかなり省略してお話しましたが、本稿では省略部分を生かし、補足説明を加えました。大学の創立二〇周年に際して、記念講演者の一人となる機会を与えられたことを光栄に思い感謝しています。講演の際には、重要概念の説明、要点の整理、内容に関連する写真映像、オバマやマケインの演説風景の動画などをパワーポイントにまとめ、順次スクリーンに映し出しました。本稿では、パワーポイントの表は文章として取り入れ、写真映像や音声動画映像について説明した部分を省いていますが、私の講演はそれらの効果によって大いに助けられました。パワーポイントを作成し、当日コンピューター操作を担当して下さった佐藤真千子さん(静岡県立大学に助教として勤務し、本学大学院博士後期課程で博士論文を執筆中)にあらためて謝意を表します。(二〇〇九年二月記)